

『百人一首』 中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (三)

吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風<sup>やまかぜ</sup>をあらしといふらむ

文屋<sup>ふんやのやすひで</sup>康秀

〈歌意〉

「風が吹くとすぐに山の草木が色あせるので、山風を嵐というのはもつともであらう。」

この歌は『古今集』(秋・二四九番)に出ています。

○吹くからに「からに」は、くするやいなやの意。

○しをるれば「萎(しを)る」は草木がしほみ弱ること。

(文屋康秀)

生没年不詳。平安初期の歌人。

〈字母〉

吹くからに

秋のく佐々のし

保る

れハ

むへ

山風を阿らしと

意ふらん

「雁の行」様式を応用した七行書きで書かれています。

(青藍)

中村素堂先生の書

大島香菊様提供

